

本を持って旅に

副学長 渥美寿雄

出張で日本全国、津々浦々、様々なところを訪れている。学会で、ということもあるし、市民講演や出前授業も数知れず務めてきた。移動の際に飛行機を使うことは減多になく、北海道や沖縄を除けば、長距離でもほとんどは鉄道利用である。なぜ鉄道かと問われると、その方がリラックスできるからと答えることにしている。別に飛行機を怖がっている訳では無いが、ゆっくり飲み食いできる、本が読める、ということに魅力を感じている。つまり、鉄道ファンを指す、乗り鉄、撮り鉄ではなく、呑み鉄ということになるのかと思う。また、行く先々でも居酒屋探訪家の真似事のようなことをしていたりする。

本のジャンルは多種多様で、何を讀むかは、その時次第である。もちろん仕事に関わる情報に目を通すことが多いが、歴史小説だったり新書だったり、はたまたお酒に関わる本だったり。例年図書館で企画されている「本の福袋」では、呑み鉄の合間に実際に読んでみて「面白いな」と思った本から選び、推薦するようにしているが、この福袋で居酒屋探訪の本を手にした学生さんがどう思ったかは聞いてみたいところではある。この本で取り上げられているのは概ね日本酒であるが、日本酒の国内出荷量は、昭和48年をピークに年々減少傾向にあり、令和4年では、ピーク時の1/4を下回っているとされている（農林水産省データ）。また、20～30代では7割の人が日本酒を飲まないというデータも出ていたりする。和食はもちろん、他国の料理にもこれほど寄り添い、料理を引き立てる飲み物は無いと思っている者からすると残念な気持ちになってしまう。醸造技術が進歩して一昔

前とは全く別次元の「作品」が作り出されているとか、流通の進化で米も水も全く違うところから運ばれて作られているのも非常に面白い。しかし、こうなってしまうと地元の酒とは言えず、本当に地酒なのか、が問題になりそうである。その一方で、例外はあるものの、地元らしい味わいを守っているところが多く、この意味で「その地方ならではの」が味わえるのも日本酒の魅力と言える。訪れた町で地元の料理を頂く場合、たいていその地元のお酒と共に合わせるようにしているが、その土地の気候風土、食材との相性に加え、地元の嗜好や食文化を反映していて興味が尽きない。

ここ数年、海外へ出る機会がめっきり減ってしまった。直前は、コロナ禍の少し前に大学院生と共にアメリカへ行った時になってしまう。アメリカでは、公共の場、公衆の目に触れる場所での飲酒が禁じられていることが多いため、飛行機の機内でも飲みづらい雰囲気となっている。一方で、アメリカであっても、学会の中で開催される晩餐会では、数多くの飲み物が提供されるし、ポスター発表の場でもビールやワインが提供されることが多く、グラス片手に議論白熱となる。自分自身がそうだからなのかも知れないが、知己の海外研究者にワインマニアが多い。研究の話題よりも、ワインの話題の方が盛り上がり、延々と話が続いてしまったりする。もちろんワインそのものの話題もあるが、あの大統領就任式の時には、こんなワインが出されたとか、あの首相はこんなワインが好みとか、海外の国賓が訪問した時には、こんなワインが出され、別の国の国賓の時にはランク下のこ

んなワインで…などなど、話が尽きない。外交の場や公式の場で、どういのお酒、ワインが提供されたのか、というのは非常に高い関心を持って語られるし、外交の場、公式の場でのお酒やワインのもつ重要性は想像以上に高い。少し古い本になるが、「ワインと外交」（新潮新書）や、「教養としてのワイン」（ダイヤモンド社）を事前に読んでいたのが非常に役に立った。しかし、アメリカ人研究者は自宅の地下セラーに500本とか、ドイツ人研究者も同様に…とか、これはなかなか真似ができず、大変にうらやましい限りである。

ちょうど30年前に、本学の留学制度で1年間ドイツに滞在していた。住んでいたところは、ドイツ南西部の町、シュトゥットガルトである。メルセデス・ベンツ、ポルシェの本社がある工業都市であり、最近は日本人選手が活躍してサッカーチームの名前も有名になった。ここの市民は儉約家と言われ、強い方言を話し、標準ドイツ語のことを「あれはハノーバー方言で、きざだ」と言い、ドイツで一番食べ物が美味しいというのを自慢としている。地元のサッカーチームが勝った時には、中央駅で深夜まで大合唱で盛り上がる。さすがにたこ焼きやお笑いの文化は無く、現地のネッカー川に飛び込む人もいなかったと思うが、日本を離れても自分の生まれ育った町に戻ってきたようで、大いに馴染むことができたのも懐かしい思い出である。この1年間の滞在中は、ほとんど鉄道を使って移動をしていた。ベルリンまで7時間とか、研究所のドイツ人メンバーとウィーンでの現地集合と約して同じく7時間とか、当時は腰や背中が痛くなるようなことも無かったのが幸いしている。鉄道乗車中の過ごし方は、結局30年経っても全く変わっていない。日本から持ち込んだドイツ語の教科書3冊も含め、かなりの数の本を読破した。酔いもあるので、どこまで頭の中に入ったかは怪しいところではあるが。

小説は、その物語の世界に転生させてくれるし、本で得られる情報や知識は、断片的な

ものの寄せ集めにならず、良質であることが多い。「本を持って旅に」は、これからも続けていきたいと思っているし、この拙文を読んでいただいた皆さんにも是非お勧めしたい。さて、次はどんな本を読もうか、図書館で足を止めて探してみることにしよう。図書館の興隆を祈りつつ。